

自閉症スペクトラム障害児を対象とした音楽療法における関係の質の変化 ——音・音楽を通したコミュニケーションの変化に着目して——

重田 絵美

はじめに

本論は自閉症スペクトラム障害児を対象とした音楽療法の実践事例について、音・音楽を通したコミュニケーションの変化に着目して検討することにより、セラピストと対象児の「関係」の質の変化を考察することを目的としている。自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders: 以下 ASD¹）は社会性の障害を中心とする発達障害である。音楽療法では、このような障害を持った対象児について、対人（相互）交流の促進、コミュニケーション意欲、意思伝達能力の向上、問題行動の軽減といった、社会性の向上という目標が設定されることが多い。一方、対象児がどの程度変化したかという評価は、対象児本人の問題として、個人の変化の問題として捉えて提示する方法が一般的である。特に近年では療法の有効性に関するエビデンスを求める実証的研究が重視される時流のなかで、客観的に評価可能な行動側面が焦点化される傾向が顕著である。しかし、社会性を問うならば、その根底に、人と人の「関係」があることは自明である。ゆえに、人と人が関わり合ってつくる「関係」をどちらか一方だけの側面から見ている限り、本質的な問題が看過されたままになると言わざるを得ない。ASD 児の問題の中心は、まさに他者との「関係」の障害そのものであり、他者との「関係」の質の変化はきわめて重要な意味をもっている。とりわけ、それが「どのように」変化したかという質的な検討は、コミュニケーション能力や対人スキルの向上といった行動評価よりも本質的に重要であり、何よりも先に探求されるべき課題であると考えられる。

「関係」は人と人の間に生まれるものであるから、「関係」の質は、対象児の行動変化の客観的な観察だけではみえてはこない。コミュニケーションそのものの成立・変化について、セラピストの関わり方や解釈も含めて検討することで初めてあきらかにすることができる。音楽療法で、音・音楽を通して生まれる「関係」には、音・音楽の機能、セラピストの感じ方や関わり方が深く影響するため、これらの因子を捨象せずに分析・考察することが求められる。本論では、臨床心理学者の鯨岡の「エピソード記述」の方法論に準拠しつつ、事例分析を行う。「エピソード記述」は、人との関わりにおいて体験される「生の実相」を、当事者、関与する人を含めて生き生きと描くエピソードとして取り上げ、それを基本的なデータにす

る質的アプローチであるとされる²。関与観察によって現場で体験した印象深い場面を生き生きと描き出した「エピソード」をもとに、エピソードを「図」として切り出すことになった関与観察者の問題意識、あるいは理論等との関連を明示し、「メタ観察」によってエピソードによって描き出される「意味」を深く考察して提示する方法である。本論ではこの「エピソード記述」を用いて、音楽療法の場で、音・音楽を通したコミュニケーションが成立し、変化が生じた印象深い場面を取り上げ、対象児の音・音楽がセラピストにどのように感じられ、受けとめられたのか、セラピストがどのように音・音楽で働きかけたのかということを描き出す。その後、コミュニケーションの成立・変化から、両者の「関係」がどのように成立し、変化していったのかという「関係」の質の変化とその意味を考察していきたい。

1. Aの事例

1-1. 記述・分析の方法

本事例の記述、分析に用いる「エピソード記述」の要件としては(1)背景の提示、(2)エピソード本体の提示、(3)メタ観察の提示が挙げられている³。(1)背景の提示では、関与観察の場やエピソード場面の背景の状況を描き、エピソード場面がどのような状況で生まれたかが読み手に理解できるようにする。(2)エピソード本体の提示では、まず読み手がその場面を客観的に把握できるように出来事を記述する。同時に、関与観察している書き手がその事態をどのように捉えているかを記述する。そして当事者の一人である書き手が、その場面において人と人の「あいだ」に生じているもの、具体的には関わる相手(他者)の思いや意図といった「間主観的に把握されるもの」、自分自身の思いや場の雰囲気なども記述に盛り込む。この関わり手の「主観」については従来の客観主義的な研究の枠組みでは非科学的データとして捨象されるべきものであった。しかし現実の対人関係の出来事においては、関わり手の間主観性に基づいて相手に対する何らかの関わりや対応が生まれるものであるから、対人関係における出来事の質的な意味を探るうえで関わり手の間主観性を検討することは不可欠になる。(3)メタ観察では、エピソード場面を「図」として描きだした書き手の問題意識や理論的背景を掘り下げていく。そしてエピソード場面で描かれる出来事の意味を越えた「メタ意味」を多元的に提示することを目指す。

本事例ではこれらの方法に準拠し、以下の手順で分析を行った。分析対象のセッションは5歳のASD児、Aを対象とした初回から6回までのセッション(2019年3月～6月実施⁴)である。分析では全てのセッションの映像記録とAの変化について言語化した記録をもとに、音・音楽を通したコミュニケーションが成立し、変化が生じた重要な場面を抽出した。それらの場면을映像記録によって微視的に繰り返し確認し、客観的に観察できる事柄を時系列で言語化した。そして、セラピストが間主観的に把握したもの(どのようにAや音・音

楽を感じ取っていたのか、あるいは、なぜその音・音楽によって関わったのか等)を盛り込み、3つのエピソードとして記述した。次項では事例の背景、エピソードの背景となるセッション経過の記述、エピソード本体(ゴシック体で四角で囲んでいる)の提示、その後メタ観察としての分析・考察を行う。

1-2. 事例の背景

A(知的障害を伴うASD児、2019年8月現在5歳の男児)は言語発達に遅れがあるが、簡単な理解言語があり、一語文を中心とした表出言語が出始め、エコラリア(反響言語)もみられる。Aは診断当初の2017年頃から親子を対象とした集団の音楽療法的活動に参加していた。そこで筆者とAとの関わりはなかったが、担当スタッフの話からは、他の子供達と関わらず1人で歩きまわったり別の歌を口ずさんでいたりすることが多く、楽器については音に対する興味というよりも、おもちゃを扱うような関わりが多かったようである。療育センターにも通い始め、大人との関わりは少しずつ持てるようになってきているが、他の子供との関わりは苦手ようである。母親によれば、基本的に一人遊びが好きで聴覚過敏性も出てきているものの、最近では知っている歌を口ずさむことも増えてきたことから、個人セッションを通して人と一緒に音楽を楽しむようになってほしいとの要望があった。セッションは1回30分、基本的には2週間に1回の頻度で実施し、筆者はセラピスト(以下、Th.と略)として関わった。セッションではAの意思や気持ちに沿って自発的な音・音楽への関わりをひきだし、音・音楽による情緒的交流を目指して実施した。

1-3. 経過

初回のセッションの導入時ではTh.が対面して関わろうとすると、Aはそれを避けて同室にいた母親の元に駆け寄ったが、始まりを告げる挨拶の歌に対しては拒否的な様子はみられなかった。この歌は以前にAが参加していた集団の音楽活動でも使用されていたことも関係していたかもしれない。新しい環境に若干の戸惑いはあるようだが情緒は比較的安定していた。Th.がメタロフォン⁵やシンバルなどの楽器を勧めると、Aは初めこそ「やだ」や「やって」と言っていたが、Th.が楽器の音を少し出しながら誘ってみると、Aは自分でもマレットを持って音を出し始め、楽器に注意を向けた。Aの音の出し方はそれぞれの楽器の響きを体験しているという様子であり、次第にメタロフォンを中心に音を出すようになった。シンバルよりも様々な音高があり残響が豊かな楽器を気に入ったようだった。音板をたたいて音を出すだけでなく、マレットをすべらせて複数の音の響きを出すグリッサンドの奏法も、Th.のやり方を見てすぐに取り入れていた。Th.はAが十分に楽器と向かいあって音を感じる時間をつくり、次の展開としてAの音の世界に共に入る方法としてピアノの音での関わりを考え、タイミングを待っていた。次のエピソード1は、楽器の音を通したAと

の出会いから音によるコミュニケーションの芽生えがみられた場面である。両者のコミュニケーションに変化がみられる記述に下線を引き、後に分析・考察を行うため、場面ごとに (i) ~ (iv) の番号をつけた。

1-3-1. 【エピソード1：音への気づきからコミュニケーションの萌芽】

A は右手に持ったマレット1つで様々な音板をたたいたり、1つの音、3つ続けた音、9つ程続けた音をたたいたりして様々な音高や響きの具合を聴きながら探索していた。(i) そのなかで A が比較的長い音列の音<CCCDGEAAG…グリッサンド>を出した瞬間があった。Th. は『これを真似してみよう』と思い、A と同じような音列をピアノで、オクターブ上で追いかけるように瞬時に応答した。A の音よりは少しゆっくり、抑揚をつけてフレーズのように弾いた。すると、A は後ろで鳴ったピアノの音に振り向いて Th. を見た。Th. は『A が気づいた』と思った。A は少しの間、Th. を見て振り向いたまま音を出し続け、またメタロフォンに向き合った。

(ii) Th. は『音(ピアノ)は A に受け入れられているようだ』と考え、ピアノで A の音の響きを支えるように和声的なベースを入れながら、時々 A の音列を模倣して応答していった。A はピアノが入る前は、音のある程度出してみても休止していたが、ピアノが入った後は、それまで以上に様々なやり方で音を出すことに夢中になっている様子を感じられた。A の音の出し方からはリズムというよりも様々な音高の連なりと響きの世界を感じているように思われた。Th. は A のメタロフォンを図として主役にし、ピアノの音が背景となるように心がけた。具体的には A の音の変化に応じて、和声の変化による響きの印象の変化、低音域や高音域を加えて音の厚みや広がりを出すようにした。

(ここでコ・セラピストが A をピアノの近くに移動させ、近い距離で斜めに向き合うような姿勢に変える。姿勢の変化を A は拒否せず、A の集中も途切れなかった)。

(iii) A と Th. が互いを見られるようになると、A は Th. を見ながら、それまでよりも音を大きく出すことがあった。A の音は、Th. に向けられているように感じられ、A のアピールや何らかの要求に感じられた。Th. は全体的な響きを支え、A のまとまりのある音列を模倣して応答し、A の音が比較的規則的な間隔を持つところや1音をポーンと鳴らす部分では同期して関わり続けた。そうしたピアノの変化に応じて A はチラチラと Th. を見ていた。一方で Th. を気にすることなく独り言を呟いている時もあった。

後半には (iv) Th. はピアノのほうから、響きに合うような旋律のパッセージを入れてみたり、和声の変化をつけて音の響きの色合いを大きく変えてみたりした。すると、A はピアノの和声に変化した直後にグリッサンドを入れるようになった。Th. には「これはピアノに反応しているようだ」と感じられた。次第に自然な形で互いのリズムが同期していく場面もでてきた。Th. には「一緒に音楽が進んでいるようだ」と感じられる。そして即興は比較的長く続いていたが(ピアノとのやり取りが始まってからは3分50秒程の時間)、終わりを共有することの重要性を意識していた Th. が、段々と音の動き方を少なくテンポを遅くしながら鎮静的な雰囲気に向けていった。A は終わりを察知したように締めくくるようにポーンポーンと音を出し、マレットを置いて終わる。

このメタロフォンとピアノの音のやりとりでは、筆者は A の音に対する集中力の高さに驚くと同時に「A と音を通して出会えた」と印象深く感じられた。A が Th. のピアノの音

に気づいたことによって両者が出会い、音によるコミュニケーションの萌芽がみられた。以下、変化の場面 (i) ~ (iv) ごとに分析・考察を行う。

(i) は A の「音への気づき」がみられた場面である。A が比較的長い音列 (CCCDGEAAG グリッサンド) を出した時、Th. にはそれまで A が出していた断片的な音と異なり、旋律のフレーズになりそうな、音から音楽に向かう音のように感じられた。そこでピアノで A の音列を真似して、ベース音を足して、やや抑揚をつけながらフレーズのように弾いて応答した。Th. は A の音から感じたものを、ピアノの音によって A の音の世界を壊さないように溶け込めるようなイメージで表現した。A はすぐに振り向いて気づいたのだが、その A の表情や様子からは「驚き」や「期待」といった肯定的な反応があるように感じられた。A の「音への気づき」には、Th. のピアノの音が「意外性」を持つものとして働いていたことが考えられる。この時ピアノは物理的に A の背後にあり、音は A が予測しないタイミングで鳴った。同時に、その音は A にとって恐怖や拒否を起こすものではなく、惹きつけられる音として働いた。それは、Th. が A の音の世界に近い音を表現したことで、A にとっては近いが違う、何か気になる音として受け入れられたのではないかと推察される。

(ii) は A の「音に対する注意の集中」が高められた場面である。Th. は A の音の出し方から、リズムというよりも様々な音高の響き、その連続した重なり響きの世界を感じているように思い、その響きの世界を広げるイメージで、ピアノの和声的なベースで支え、時々 A の音列を模倣して関わった。Th. のピアノの音が入ることにより、A はそれまで以上に様々なやり方でメタロフォンの音を盛んに出すようになり、音を出すことに「夢中になっている」ように感じられた。ここで A の集中を高めていたのは、音の響きの「美的な働き」であるように考えられる。A のメタロフォンの響きの世界に加え、より低い音域のピアノの音が入ることにより、響きに広がりや立体感、雰囲気の変化などが出ている。A の音の出し方には響きを増していこうとする様子が見られ、響きの広がりや厚みの「美的な働き」が A の注意を惹きつけ、興味を持続させたように推察される。そして、A の積極性につながったもう一つの要素としては、A の音が「主役」になるような音楽の作り方が挙げられる。ピアノはメタロフォンの音よりも大きく、響きも長く残せるため、A の音よりもピアノが主役になってしまいやすい。だが、それでは A よりも Th. が中心的な音楽になってしまい、A の感じている音の世界を壊しかねない。ここでは A のメタロフォンの音が「図」として、ピアノの音は「背景」として働くように、Th. は音量、音数、タッチなどに配慮し、メタロフォンの響きの支えとなり、響きを広げるような和声を入れていった。そして、A の音の変化に合わせて、ピアノの和声を変化させたり、低音域、高音域を加えて音の厚みや広がり足したりして雰囲気を少しずつ変えていった。

(iii) は、A の音が「他者に向けられた音」に変化している場面である。Th. と A の距離と姿勢の変化により、お互いに視線を交わすことができるようになったことも影響して、

AがTh.を見ながらTh.に意識を向け、音を大きく出すという変化があった。Th.にはそれが自分に向けられた音であり、Aの「アピール」や「何らかの要求」のようにも感じられた。おそらくAは自分の音が変わるとピアノの音も変わるという関係に気づいており、ここでは自分をもっと音楽を動かしてみたいという「主体性」があらわれているようであった。Th.はAの音の響きの支えや模倣に加えて、Aの「アピール」のような音に対して同期して応答した。そうしたときにAはTh.を意識してチラチラと見ることもあったが、しばらくすると独り言を呟きながら音を出して自分の世界にいるようなときもあり、他者に意識が向く時と自分の内側の世界に戻る時とを行き来しているようにみられた。

(iv)は、Aの音が「他者の音に反応する音」に変化している場面である。即興が長く続いていたためTh.は展開として、それまでAの変化に応じて変化させていたピアノを、ピアノのほうから変化させ始めた。基本的にはピアノを背景にしながらも、音と音の合間にパッセージを入れたり、和声の変化により響きの印象が大きく変わるようにしたりという変化をつけると、Aはピアノの和声に変化した直後にメタロフォンでグリッサンドを入れるようになった。それはピアノの音をよく聴いていなければ鳴らせないタイミングであり、「ピアノに反応している音」のように感じられた。ここではAにとってピアノの変化が「意外性」を持つものとして働き、Aからピアノの音に応答する変化がでてきたように考えられる。その後、次第に両者のタイミングが自然に合うところが多くなり、リズムが同期し、Th.には「一緒に音楽が進んでいるよう」に感じられるようになってくる。ここでは互いにタイミングを合わせたり息が合ったりする「同期性」がみられるようになり、最後にTh.が終わりへと導いていくときにも、Aがそれを察知して終わりの音を鳴らすという、終わりの「共有」につながっていった。

1-4. 経過

2回目のセッションでは、Aが小走りで嬉しそうに部屋に入ってくること、活動が始まると、自らメタロフォンを選びピアノを見て音が入ることに期待している様子がみられたことから、前回の活動を肯定的に記憶しているように思われた。即興的な音のやりとりでは自然な同期も多くなり、時にはTh.のピアノのリズムをAが模倣しているような場面もあり、他者の音をよく聴いて反応している様子がみられた。即興的につくる音楽以外にも、Aが知っている可能性のある歌をAのテンポ感やタイミングに合わせて行くと、音楽の終わりに拍手をして喜ぶ様子がみられるようになった。また、セッションの終わりには自らTh.の膝に座って、挨拶の言葉の語尾で一緒に声を出し、安心している様子がみられはじめた。次に提示するエピソードは、3回目のセッションの後半にTh.が歌を提案したところ、Aが身体接触を受け入れながら初めて大きな声で歌った場面である。両者のコミュニケーションに変化がみられる記述に下線をしている。

1-4-1. 【エピソード2：歌の共有から情動的なコミュニケーションの活発化】

Th.はAに「歌を歌おうか」と声をかけてAと椅子に座って向かい合った。Th.がAの手をとると、Aは左右に振り始めてTh.の膝に自分の足をのせたがる。Th.はAの手の動きのテンポに合わせて、ややゆっくりと『線路はつづくよどこまでも』を歌い始める。Aは首を少し振りながら視線は下を向いている。Aの表情からは対面を避けているというよりは「甘えているような」様子に見える。後半の「ランラン」に差し掛かると、Aは顔を上げてTh.を見る。Th.も笑顔で歌いかけるとAは「嬉しそうな」表情を浮かべる。それから顔を少し左のほうに向けるが、歌が終わろうとしても、そのままの姿勢を続けていた。Th.はAが聴いている可能性もあると考えて、もう一度歌い始めた。すると突然Aが顔を上げてTh.の顔を見ながら大きな声で一緒に歌い出した。Th.は驚きながらもAと一緒に歌えているという嬉しさを感じた。Aは歌詞の一部分を覚えているようだったが、Th.の歌う歌詞を真似しようとしながら懸命に歌っていた。後半の「ランラン」ではTh.と目を合わせて歌うようになり、歌の終わりにはAが歌のクライマックスをつくるように「ラン」と大きな声を伸ばし始めたのでTh.も一緒に声を伸ばし続けた。Th.がその長さに驚いて目を見開くと、Aも真似して目を見開いて表情がほころぶ。歌い終わると、Th.が「わあ。すごいね」と言って拍手をし、Aは感情が高まったように「わあ」と言って駆け出す。

この場面では歌いかけによりTh.とAの心身の距離が近づき、一緒に歌を歌うことができ、互いの表情や視線による親密で情動的なコミュニケーションが活発になった。これまでのセッションではAが独り言のように何かの歌を時々口ずさむことはあったが、これほどしっかりと大きな声でTh.に向かって一緒に歌うということは初めてであった。別室で見学していた母親も、Aがこのように人と一緒に大きな声で歌うというのを見たことがなかったと驚いていた。

歌を通してより親密な交流になった要因として身体接触が挙げられる。Th.が歌いかける前にAの手をとると、Aはそれを受け入れることができ、さらに自分の足をTh.の膝にのせたり、自ら身体接触を求めた。これまでの楽器を用いた活動では、むしろAはTh.とある程度の距離をとっていたのだが、ここでは両者が近い距離で直接触れながら向かい合って関わることができた。1回目の歌いかけの始まりでは、Aは下を向いていたが歌を聴いている様子があり、Aの表情からは視線や対面を避けているというよりは、Th.に「甘えている」、「安心している」ように感じられた。Th.はそのようなAの変化を肯定的に受けとめて関わった。

このような身体接触を伴った親密な空間での歌いかけには、「抱える機能」が働いていたように考えられる。これはイギリスの精神分析学者で早期母子関係理論家であったドナルド・ウィニコットが提唱した概念“holding”である⁶。「抱える機能」とは、養育者が乳児、子どもを身体的・心理的に「抱っこ」をするという意味を持つ（身体接触を伴わない心理的な「抱っこ」も含まれる⁷）。ここでは、Th.が身体接触を伴った歌いかけによってAを心身共に「抱える」ことができ、そこでAが「安心して存在しつづけられる」感覚を持たないように推察される。それにより2回目の歌いかけで、Th.と歌い始めたことにつながったように考えられる。情緒やコミュニケーションに問題を持つ多くの子どもは、相手に安心感を持てるよう

になってはじめて自らの声を解放し歌うようになるからである。

そして、歌うなかで A が Th. と視線を合わせることや、Th. が間主観的に感じられる A の「嬉しそうな」表情や、驚いて見開いた目を真似る表情の模倣など、非言語的で情動的なコミュニケーションが活発になっていった。ASD 児に苦手とされる情動的なコミュニケーションが活発になり、親密で信頼できる関係になったことは大きな進展であった。また、Th. が間主観的に「一緒に歌えている嬉しさ」を感じられただけでなく、歌の終わりに A が先導して Th. と声を長く伸ばしてクライマックスを作ったところに両者の「嬉しさ」や一緒に成し遂げた「達成感」のような感情が表れていたように推察できる。

1-5. 経過

その後のセッションで、楽器活動では Th. と適度な距離を保っていたが、Th. が「歌おう」と声をかけると、A から Th. の手をとるようになり、さらに抱っこを求めるようになった。これは A が母親に求めるような愛着行動ともとれるが、そうした「甘え」は退けるべきものではなく、むしろ肯定的に受け入れた。A は Th. に身体を預けられるようになり、歌に合わせてゆりかごのように大きく上下に揺らし、身体を通したコミュニケーションも行った。A はそのような身体接触を通して、くつろいだ様子を見せたり、ふざけ始めたりしており、十分に「甘えられる」ように変化していった。次のエピソードは6回目のセッションで、両者の声・言葉・楽器の音を通したやりとりが活発になる場面である。両者のコミュニケーションに変化がみられる記述に下線をしている。

1-5-1. 【エピソード3：協調的な音楽から他者に向けられた言葉の発現】

A はスレイベル、Th. はカスタネットを持って対面して座る。Th. は以前にも導入したことのある『おもちゃのチャチャチャ』を提案し、A に“やってみようか”と言うと、A は“やってみるか”と大きな声で返す。そして、振返ってピアノを担当するコ・セラピストのほうを見て音楽を期待している様子である。ピアノの前奏が始まると、A も Th. も楽器を鳴らしチャチャチャのリズムを合わせて鳴らす。Th. が歌おうとすると、突然 A が Th. の顔を見ながら高い声で“あ～～”と声を出し始める。Th. は「歌っているのだな」と感じ、一緒に真似して“あ～～”と声を出す。その後で Th. が歌詞を歌い始めると、A は歌詞のリズムでリズムカルに鳴らし始める。Th. が「空にキラキラ」と歌い始めると、A は今度は Th. の声の高さにやや近い声で“あ～～”と一緒に声を出し始める。ここでも A が「一緒に歌おうとしている」ように感じられる。いくらか声を伸ばした後、A は楽器を鳴らし始める。A のテンポ感をベースにして、A の声や楽器の音、Th. の歌、コ・セラピストのピアノのリズムなどがうまく合って流れており、「三人の呼吸が合った音楽」になっていると感じられる。曲の終わりに近づくと、A はスレイベルの鈴を細かく振り始めたので、Th. もそのリズムに合わせて“チャチャチャチャチャチャー”と合わせて歌う。音楽は終わったが、すぐに楽器を片付けずに座っている A を見て、Th. は A に“もう一回やってみる？”とたずねる。すると A が“あつかぬの… たのしい”（語尾音は下がる）と Th. に向かって言う。Th. は最初の言葉が聞き取れず、口を動

かす仕草をすると、Aがさらに大きな声で「たのしい」（語尾音が上がる）と言う。Th.はAの意外な言葉に驚きながら嬉しい気持ちで「楽しいね！」と答えた。

この場面では、AとTh.だけでなくコ・セラピストも含めて「三人の呼吸が合った」ように感じられた音楽が終わった後に、Aから「たのしい」という言葉がTh.に向けられて出てきた。ここで演奏した『おもちゃのチャチャチャ』は、それまで何度か楽器の活動で用いたことがあり、Aは曲のリズムの特徴や構造を理解し始めていたと思われる。Aにある程度の予測が働いていたことで、Aがリズムに合わせて楽器の音を鳴らしたり、声を出したりすることができたと推察できる。セラピストは基本的にはAのテンポ感やリズムのタイミングに合わせていたが、三人それぞれが互いの音を聴き合うことで、息の合った「協調的」な音楽が生まれていた。ここに働いていた音・音楽の機能は「予測性」を元にした「同期性」である。相手のリズムやタイミングなどに合わせる「同期性」は乳幼児と母親の原初的コミュニケーションでもみられるもので、「息を合わせる」といったコミュニケーションの流れをつくりだし、両者の間で「共有」を生み出すものである⁸。ここでは既成曲の枠組みではあるが、互いのリズムのタイミングを合わせたり、歌が始まる場所でAがTh.の声を真似するような声を出し始めたり、曲の終わりではAが細かく振るリズムに合わせてTh.がリズムを変えて歌ったりと、互いを聴き合い、「協調的」と感じられる音楽の共有につながっていった。

そして、ここで重要な変化としてAが発した言葉、すなわち音楽をする前の言葉と、終わった後の言葉に注目したい。前者はTh.の提案の言葉「やってみようか」に対するAの「やってみるか」という返した言葉である。これは他者の質問の言葉に対して、同じ言葉を繰り返す、自閉症児によくみられるエコラリア（反響言語）に近いものであり、これまでのセッションのなかでも時々みられるものであった。ただし、それが意味を持たないわけではなく、ここでは、ただ自動的にTh.の言葉の音を繰り返すというよりも、語尾の変化や声の大きさ、抑揚、その後の音楽への意欲的な参加の様子から、そこにAの「同意」や「意欲」などの気持ちがのせられていたように推察できる。

一方、後者の「たのしい」という言葉は、Th.の「もう1回やってみる？」という質問の後に出来た言葉で、エコラリアではなく、Aが自ら発した言葉である。Aは言葉の理解や発語に遅れがあり、自分の気持ちや要求の言葉などもスムーズに出すことが難しいため、Th.の言葉の意図をどの程度つかめていたかは分からないが、Th.の言葉に対して何かを言いたいというAの強い意思は感じられた。1回目にAが言った言葉の全てをTh.がうまく聞き取れずに聞き返そうとすると、Aはさらに大きな声で「たのしい」を強調して言った。1回目の「たのしい」はやや語尾が下がっており、2回目は語尾音が上がっていたが、基本的にAの言葉は語尾音が上がりやすい特徴があるため、それが質問の意味を持っているとはすぐに結びつけられない。Aの「たのしい」という言葉は自分の気持ちなのか、セラピストへの質問なのか、音楽についてなのか様々な可能性が考えられる。しかし、おそらく

皆で音楽をすることによってAに「たのしい」という言葉が浮かび上がり、その言葉をセラピストに伝えたかった、或いは聞いたかったということ自体が意味をもつのではないかと考えられる。後に母親の話からも、普段このように「たのしい」という言葉を言う場面を見たことがなかったようだった。そしてこの場面の後、Aは『London Bridge』や『Twinkle Twinkle Little Star』など英語で覚えている歌や好きなアニメの曲などをTh.に向かって大きな声で歌い出した。それは、これまで時々Aが独り言のように口ずさむ歌とは異なり、他者に聴いてほしい、一緒に歌いたいという様子が感じられた。そうした様子からも、Aの「たのしい」という言葉には、音楽や人に対する前向きな気持ちの芽生えがみられるような心の変化がみられるように推察できる。

1-6. その後の経過

その後のセッションでは楽器による即興、Aが歌う曲、Th.が提案する曲、Aが口ずさんだ歌のフレーズを使って作る即興的な音楽など、様々な音楽のなかでAは意欲的に参加している。また、Aが自ら追いかけて誘うこともあり、動きを使った人とのやりとりを楽しむ様子が見られている。歌の活動では、Aの「満足そうな」「嬉しそうな」と思われる笑顔が出るようになり、歌が終わると拍手をすることが増えている。セッションを継続するなかで、他者に向けられる音や表情、言葉、動きといったものが増えてきており、今後もそれらを相互的な交流につなげていくことを目指していきたい。

2. コミュニケーションの成立・変化にみられる「関係」の質の変化

前項では、3つのエピソード記述から、音・音楽を通したコミュニケーションが成立し、変化した場面について、コミュニケーションの具体的なやりとり、セラピストの受けとめや働きかけ、臨床的な音・音楽の機能の観点から分析し、考察を行った。3つのエピソードからは、①「音への気づきからコミュニケーションの萌芽」、②「歌の共有から情動的なコミュニケーションの活発化」、③「協調的な音楽から他者に向けられた言葉の発現」という大きな変化がみられた⁹。それぞれの変化は、音・音楽を通してTh.とAが何らかの音楽的要素の共有をしたことと深く結びついている。そうした観点からは、①は「音の響きの共有」、②は「声による歌の共有」、③は「声や楽器の音によるリズムの共有」とみることができる。ここでは、これらの観点から、音・音楽を通したコミュニケーションの変化により、セラピストと対象児の「関係」がどのように成立し、変化していったのかという「関係」の質の変化について、まとめておきたい。

エピソード1の①「音への気づきからコミュニケーションの萌芽」では、Aが鳴らしている音をTh.が感じ取り、ピアノによって音の響きの世界に共に加わることができた。A

がそのピアノの音に気づき、受け入れたことにより、Th. との音を通した出会いが生まれた。多くの ASD 児は、導入場面で A もそうであったように対面した関わりを苦手とし、人から逃げたり視線を逸らして横を向いたりすることが多い。ここでは対面の関わりではなく、意外性があり、A の音と少し似た雰囲気を持ちながらも異なる質の音が A を惹きつけ、コミュニケーションの糸口になった。そして、Th. が A の音の動きに合わせてピアノを変化させながら、A の音が「主役」になるようにしていくと、A から Th. に向けて「アピール」するような音が出始めた。そこには、A 自身の「主体性」が表れているように推察できた。最後には、A には Th. の音を意識した反応がみられ、音楽の終わりも共有できていた。ここでは Th. と A が音を通して「出会う」ことができ、音の響きを通した関わり合いが生まれた。その関わり合いのなかで、Th. や Th. の音に対する A の意識が高まっていく過程をみることができる。A がこの場面の後もこのような音の関わり合いを自ら求めていったことから、Th. との間に音を通した関係が成立し、人と一緒に音楽をしたいという意欲につながっていったように思われる。

エピソード2の②「歌の共有から情動的なコミュニケーションの活発化」では身体接触による親密な空間での歌いかけによって、A の「甘える」様子がみられ、初めて Th. に向かって歌いだし、一緒に歌うことができた。この歌いかけには身体的・心理的に抱っこをすることで子どもが安心して存在しつづけられる「抱える機能」が働いているように考えられた。そして、歌による情動的なコミュニケーションが活発になり、歌の終わりを共有することにより、「嬉しさ」や「達成感」のような感情の表れを感じ取ることができた。ここでは、Th. と A の関係は、身体接触や情動的なコミュニケーションの活発化を通して、より親密な関係に変化したといえる。ASD 児が苦手とする対面での関わりや視線を合わせること、表情の模倣などがみられたことから、互いに信頼できる関係になったといえる。また、ここで A に「甘える」様子がみられたが、その後のセッションでも、歌の活動では抱っこを求め、寛いで安心した様子を見せるなど、十分に「甘えられる」ようになっていった。この「甘えられる」関係は、他者との信頼関係が基盤となってできるものであり、他者との関係における安心感につながるものであることから、情緒や対人関係の育ちにおける肯定的な変化として捉えた¹⁰。

エピソード3の③「協調的な音楽から他者に向けられた言葉の発現」では、A と Th. の声・言葉・楽器の音を通したやりとりが非常に活発になった。自らの声や言葉を用いて、相手の働きかけに対して答えたり、音楽の中でも相手の声を模倣したりする様子がみられた。コ・セラピストを含めた三人が互いの音や声を聴き合ってタイミングを合わせようとする「同期性」が多くみられ、「声や楽器の音によるリズムの共有」ができ、「協調的」な音楽が生まれた。そして、音楽が終わった後に A から「たのしい」という言葉が出てきた。その言葉の意味は定かではないが、音楽によって A に浮かび上がった「たのしい」という言葉をセラピストに

伝えようとした、他者との関係のなかで言葉を使おうとしたということが大きな意味を持つと考えられる。ここでの両者の関係は、相手の反応に対する応答が活発に行われることから、相互的なやりとりができる関係に深まっていったといえる。そして、そこには自らの声や言葉で相手と関わろうとする、Aのコミュニケーション意欲の高まりをみることができる。

本事例からは、Aが音・音楽を通してセラピストと出会い、何らかの音楽的要素を共有していくことで非言語的、情動的コミュニケーションが豊かに行われるようになり、セラピストとの相互的なやりとりや、関係のなかでの言葉の使用といった変化がみられ、Aのコミュニケーション意欲も大きく育っていった。これらのコミュニケーションの変化の過程では、Aとセラピストの関係が音を通して成立し、次第に親密な信頼関係や、甘えられる関係ができ、より相互的なやりとりができる関係に深化していくという関係の質の変化をみることができた。このような関係の質の変化は、ASD児の情動、社会性、言語の発達を支えていくうえでの大切な基盤となると考えられる。言葉は、他者との関係のなかで育つのであるが、子ども自身から他者に関わりたい、何かを伝えたい、聞いてみたいという意欲が育つように、人との関係を丁寧に深めていくことが重要だと考えられる。

一人の対象者の短期間の事例から、初期段階のセラピストとクライアント関係におけるコミュニケーション形成過程を考察してきたが、今後は様々なケースを対象に、どのような関係や交流がASD児の心身、社会性を育てるうえで重要であるか考察を深めていきたい。エピソード記述を用いて、セラピストが間主観的に捉えたものを考察に組み込むことは方法論としてきわめて魅力的であるものの、適切な表現をもって言語化することの難しさにも直面し、作業が難渋したことも事実である。さらに説得力のある記述と分析解釈がこの先の課題として残されている。しかし、ここで試みたように、対象児の変化を記述評価するだけでなく、セッションに関わっているセラピストについても「関係」という観点から考察の対象とし、その関係の質と質の変化を分析検討することが、音楽療法の実践や評価に有意義な視点をもたらすことは間違いないだろう。この論考を端緒として、さらに考察を深めていきたいと思う。

【主要参考文献】

- 鯨岡峻：エピソード記述入門。東京大学出版会、2005。
 小林隆児・鯨岡峻：自閉症の関係発達臨床。日本評論社、2005。
 小林隆児：関係からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム。ミネルヴァ書房、2014。
 Malloch, S. & Trevarthen, C.eds : Communicative Musicality. Oxford University Press, 2009.
 Winnicott, D.W. : Playing and reality. Tavistock Publications, London, 1971.

【注】

- 1 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth edition, American Psychiatric Publishing, 2013. (高橋三郎、大野裕監訳：DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院、pp.49-57、2014.)
- 2 鯨岡峻：エピソード記述入門. 東京大学出版会、pp.15-23、2005.
- 3 鯨岡、前掲書、pp.130-131.
- 4 セッション実施場所：東京藝術大学千住キャンパス。形態：個人セッション、メインセラピスト：筆者、コ・セラピスト：鶴飼文代。2019年8月現在も継続中。本論で分析する事例の使用にあたっては、対象児の保護者に同意、承諾を得ている。
- 5 鉄琴に大きな共鳴箱がつき、残響が長く、豊かな楽器である。一つ一つの音板を取り外すことができ、セッションではCDEGAのペントニックの音板に設定していた。
- 6 Winnicott, D. W. : Playing and reality. Tavistock Publications, London, 1971.
- 7 これは子どもの育ちにとって重要な「母親の機能」の一つとされており、子どもは「抱える機能」によって内的統一感を育むと同時に外界からも守られ、「存在し続けること」の感覚をもつことができるかとされている。
- 8 Malloch, S. & Trevarthen, C. eds: Communicative Musicality. Oxford University Press, 2009.
- 9 わずか6回のセッションという短期間で顕著に変化した原因としては、Aと母親の良好な愛着関係、それに起因する情緒面での安定といった心理要素に加えて、楽器や音楽に対する興味関心が非常に強いことが挙げられる。母親から感覚過敏性の傾向があると伝えられていたにもかかわらず、セッションではほとんど観察されていないことから、このような興味関心の強さが感覚過敏に勝っていると考えられる。
- 10 乳幼児早期の自閉症児と母親の心理臨床の実践と研究に携わる小林（2014）は、ASD児は甘えたいという欲求をもちながらも、実際の母との関わりでは抱っこを嫌がったり、アイコンタクトや表情による情動コミュニケーションが苦手であったりして、「甘えたくても甘えられない」というアンビヴァレンスを持っていることを指摘している。結果としてASD児は十分甘えられないまま育つことが多く、それが情緒や対人関係にも影響を及ぼすことを指摘している。小林隆児：関係からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム。ミネルヴァ書房、2014.

Changes in Relationship Quality through Music Therapy for a Child with Autism Spectrum Disorder

SHIGETA Emi

This article clarifies changes in the quality of the relationship between a client and therapist in music therapy for a child with autism spectrum disorder (ASD) based on a case study analyzing changes in musical communication. The therapeutic meaning of these changes is then considered. One of the focal problems in ASD is sociability or one's ability to build relationships with others. Sociability research has, so far, focused on ability and change. However, it is important to pay attention to relationships and demonstrate how they are built and transformed. The quality of relationships can be clarified by considering the establishment and changes in communication from the point of view of the involvement and interpretation of a therapist. This article analyzes musical communication in a case utilizing "description by episode," a qualitative research method conceptualized by Kujiraoka in Japan. "Description by episode" accounts not only describe changes within the client but also the intersubjectivity between participants and, in particular, the therapist.

Based on three descriptions by episode, the analysis clarified three steps in the process of changes in musical communication. The first is the beginning of communication by the client's attention to sound. In this step, the client showed signs of awareness of the therapist. The second is the activation of emotional communication via song sharing. Here, a sense of security through close contact with the therapist was observed. The third is the increase of interactive communication by voice, words, and sound. In this stage, the client used the word "enjoy" to tell something to the therapist after cooperative music interaction.

These changes in communication show an increase in the patient's motivation to communicate and build a trusting relationship with the therapist. These changes are extremely significant for children with ASD, as they are the foundation of emotional relationships and verbal communication development.